



公共施設の再配置に関連する基本的な情報をお知らせします。

## 財政構造の変化

40年前、職員の皆さんは、どこで何をしていましたか。学生だった人、まだ生まれていなかった人、私は小学5年生で、担任を困らすようなことばかりをし、将来の夢は「パイロット」だったと思います。では、20年前は、どこで何をしていましたか。私は、教育総務課で学校施設の管理の仕事をしていました。今やその頃乳幼児だった娘たちも成人し、自分の頭は白髪だらけになりました。

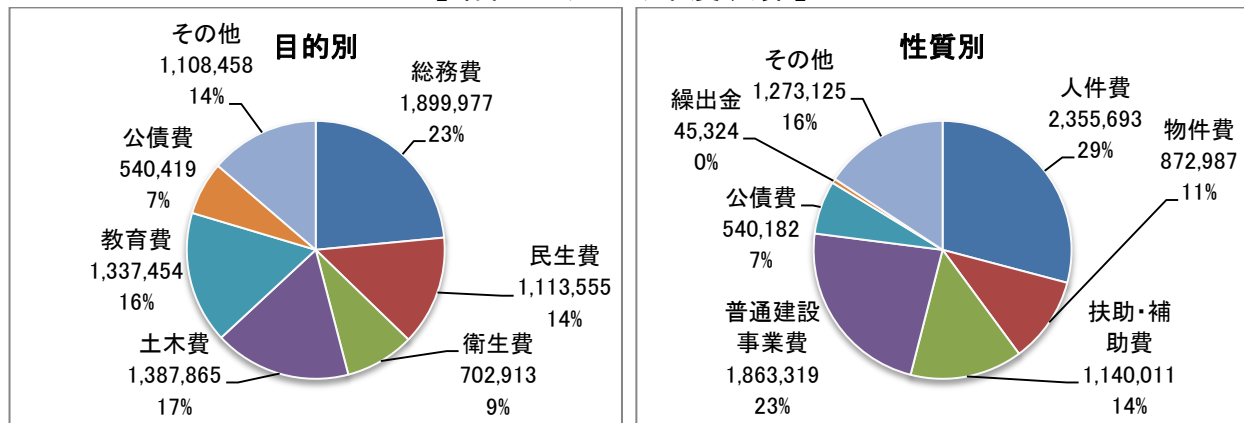
年数の経過とともに、人もまちも姿を変えていきますが、秦野市の20年前と40年前は、どんな姿だったのか、財政(歳出)構造から探ってみましょう。

### 今は昔…

まず、今から42年前の昭和50年度です。この頃の秦野市の一般会計歳出決算額ですが、およそ81億円と、今年度予算の6分の1程度しかありません。

昭和40年から50年にかけて、秦野市の人口は8割も増加しているため、都市基盤の整備に追われていたかと思えば、そうでもありません。目的別歳出で最も大きな額を占めていたのは総務費、そして土木費、教育費と続きます。当時の主要な施策の成果報告書を見ると、主な事業は、才戸橋、塚原橋の新設、大根小学校校舎取得<sup>1</sup>、広畑小学校用地取得、文化会館用地取得などがあげられています。現在所有しているハコモノの5割が昭和50年代に建設されていることからすると、経済成長と急激な人口増加に対応しきれておらず、公共施設はまだ不足した状態で、この後急激に生まれて成長していったのでしょう。

### 【昭和50(1975)年度決算】



それから20年後の平成7年度です。この頃には、歳出決算額もおよそ432億円となり、現在に近いものになっています。そして、目的別歳出は、土木費が最も多くを占め、性質別歳出でも、普通建設事業費が最も多く、昭和50年と比較して、金額は8倍、予算に占める割合も1.5倍となっています。

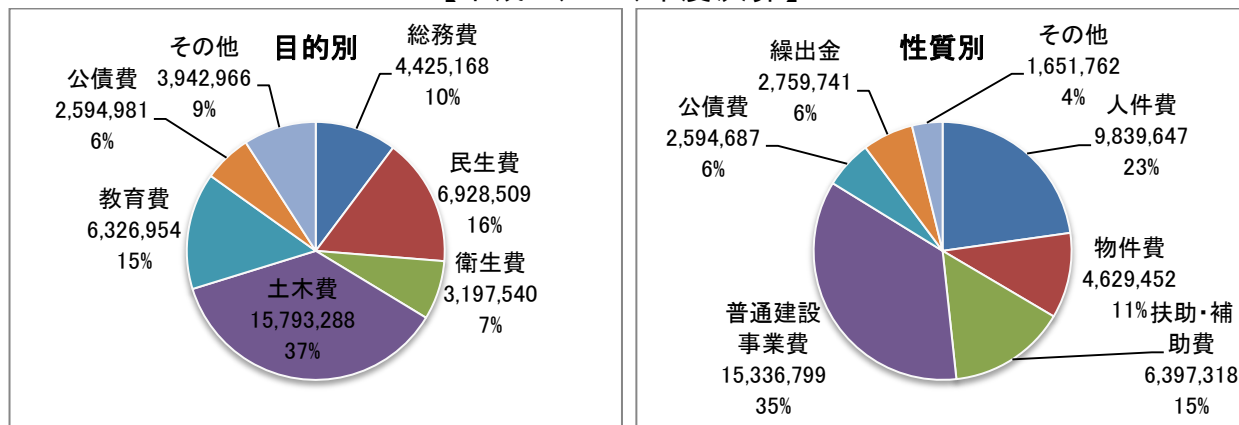
この年の主な事業は、秦野駅北口ペDESTリアンデッキ整備、秦野駅自由通路建設、渋沢駅周辺・秦野駅南部土地区画整理、総合体育館建設、おおね公園

<sup>1</sup> 人口が急増した首都圏では、学校の建設が集中したことから、国の負担軽減のため、学校建設公社という財団法人を市が設置し、この公社が建設した校舎を市が分割取得することにより、国の補助金も分割で交付するという手法が用いられていました。

用地取得、上小校舎・北小学校体育館取得、南・みなみがおか幼稚園舎取得、本町・南ヶ丘公民館建設など、まさにハードのオンパレードといった様相を呈していました。そして、まだ庁舎建設事業債の償還も行われていました。公共施設は、整備というよりも、成長から成熟に転じていたころでした。

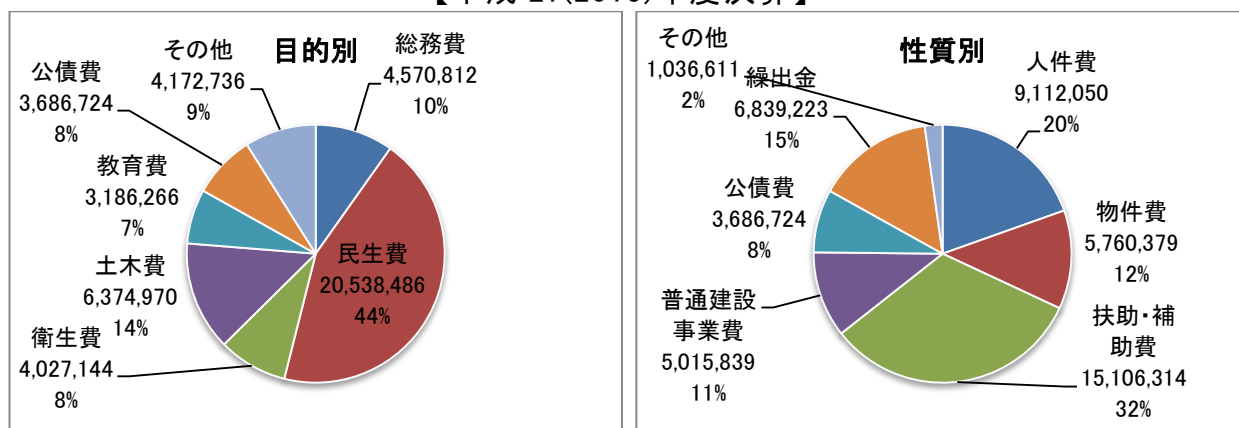
しかし、このころの決算資料を見ると、「経済の閉そく感」や、「内需拡大による景気回復」などの文字が見えます。20年経てもなお、この閉塞感が打ち破られていないということ、誰か想像していたのでしょうか。

【平成 7(1995)年度決算】



そして、さらに 20 年後の平成 27 年度、平成 7 年度の普通建設事業費以上の変化を示したのは、扶助費です。平成 7 年度と比べて金額は 2.4 倍、歳出に占める割合は 2.1 倍となっています。また、繰出金も、下水道会計への法定外の繰出し<sup>2</sup>が終わったにもかかわらず、額も割合も 2.5 倍になっています。この原因は主に、国民健康保険や介護保険会計への繰出しです。歳出決算額は、466 億円と 8 パーセントしか伸びていないので、この 20 年間でいかに財政(歳出)構造が大きく変わったのかがよくわかります。主な事業も、秦野駅南部土地区画整理、カルチャーパーク再編整備、鶴巻温泉駅南口周辺整備などはありますが、ハードはすっかりと鳴りを潜め、学校関係も、目立つのは体育館照明 LED 化事業とさびしいものです。そして、公共施設は、成熟から老化へと移ります。

【平成 27(2015)年度決算】



20 年後、自分は何をしているのでしょうか。役所の窓口で「昔はこうじゃなかった」などとクレームを言っているかもしれませんが、人には寿命があります。しかし、まちや行政には寿命がありません。20 年前に見ようとすれば見えていたもの、それを見ようともしなかったツケが残る未来にはしたくないものです。

<sup>2</sup> 本来独立会計で賄うべき汚水処理に要する経費に対する一般会計からの繰出金(税による赤字補てん)。逆に雨水処理に要する経費は、一般会計からの繰出しにより行うことを必要とする。

